九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

日本人とシンガポール人との異文化コミュニケーション : 相互協力的コミュニケーションの方略の観点から

Lai, Siew, hoon
九州大学大学院比較社会文化学府

https://doi.org/10.15017/4494521

出版情報：比較社会文化研究. 12, pp.1-7, 2002-10-31. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：

『比較社会文化研究』第12号（2002）1～7頁
Social and Cultural Studies
No. 12 (2002), pp. 1～7

日本人とシンガポール人との異文化コミュニケーション

—相互協力的コミュニケーションの方略の観点から—

LAI（ライ） SIEW（シュウ） HOON（フン）

0．序論

異なる言語や文化を持つ人々の間の異文化コミュニケーションでは誤解などのようなコミュニケーション問題が生じることは避けられないものであるといえる。コミュニケーションの問題や誤解などは一方の話者の発話や言語行動などからだけ生じるのではなく、対話者の言語行動からも生じると考えられる。従って、対話者が共同にこのような問題を解決するために、または互いの理解を高めるためにどのように相互協力的コミュニケーションの方略を使用するかを見る必要がある。しかしながら、従来このような調査は、特に日本人とシンガポール人との異文化コミュニケーションに関するものは盛んになったとは言えない。従って、この調査を通して、日本人とシンガポール人日本語学習者との異文化コミュニケーションを背景として、前述したコミュニケーションの問題とその解決方法を見出していきたい。さらに、そういった方略の使用によって、日本人とシンガポール人とのコミュニケーションがどの程度うまく行われるのかを調べる。

1．異文化コミュニケーション

1．1　異文化コミュニケーションとは

Lustig and Koester (1996：49) によれば、異文化コミュニケーションとは異なる文化に属する人々が共有する意味を創り出す象徴的プロセスである。人間はしばしば自らの文化に基づく信念や価値などを基準として他人の言語的または非言語的行為が適当であるか否かを解釈する。これは異文化的誤解が生じる原因となるであろう。Neil (1996) は異文化コミュニケーションには二つの特徴があるとしている。一つは会話の流れの中で、対話者同士の相互理解が常に継続するとは限らないことである。もう一つは対話者同士が会話をうまく進めるために努力をしなければならないことである。従って、異文化的誤解を避けるために、または異文化コミュニケーションをうまく行うために、対話者同士はお互いの文化の理解を必要とするほかに、会話の際に双方による「相互協力的な行為」も大切である。

1．2　異文化コミュニケーションにおける相互協力的行為の先行研究

Neil は異文化コミュニケーションの断絶を最小限にしたり避けたりする対話者の行為が相互協力的行為であると述べている。Neil によると、相互協力的行為によって異文化コミュニケーションを図るために対話者同士はよく相互協力的コミュニケーションの方略を使用するという。彼女はオーストラリアにおける英語圏以外の移民同士の異文化コミュニケーションを調査した。移民たちは様々な文化・言語背景に属するため、お互いが共通語の英語を用いて会話をすることが多い。調査場面は移民が勤めている会社である。移民調査対象者の殆どが英語の知識が少ない。そのため、英語で会話するのがかなり難しいのではないかと Neil は推測したが、調査データではコミュニケーションの断絶というより、むしろ対話者同士が相互協力的コミュニケーションの方略を使用して会話をうまく行っているということが示された。

調査データの分析では相互協力的コミュニケーションの方略は話し手だけではなく、会話に協力するために聞き手の対話者にもよく使用されることが分かった。従って、Neil (1996：187) は話し手が使用する方略を「話し手方略」、聞き手が使用する方略を「対話者方略」に分けた。さらに、調査データでもっとも現れてきた相互協力的コミュニケーションの方略を「発話順番の分担」「反復」「言い換え」「明確化要求」「話題発展のための質問」の五つに分類し、相互協力的コミュニケーションの方略の枠組を提唱した。

Funayama (2002) は日本語話者と中国語話者との会話をデータとして異文化コミュニケーション能力を調査した。会話の中での「語彙を求める・提供する現象」を中心とし、対話者同士がどのように協力し合って、母語話者の言語知識をもとに非母語話者の言語障壁を解決させるのかを知ることが調査の目的の一つであった。さらに、もう一つの目的として、それに必要な要素が何であるかを明らかにすることも考えられた。調査対象は Shanghai-BDK という日本と中国の合併企業に勤めている日本人と中国人である。日本人の中に中国語が話せる人はごく僅かであり、

会話能力も低いとしている。職場では会話の殆どが中国語で行われるが、日本人が適切な中国語を言えない場合に中国人の対話者に助けを求めるなどしてお互いの話を理解し合えるように設定した。

Funayama は Shanghai-BDK の社員同士が行う会話の場面を録画し、その会話の内容を文字化した。さらに、それを分析して、会話の中で語彙を求める・提供する現象における特徴を明らかにした。一つ目の特徴としては、非母語話者によって発話された不完全または不適切な言葉に対して母語話者が返答する場合、もしくは話の中断が起こった場合（非母語話者が沈黙して適切な中国語を考える）に、語彙を求める・提供する現象はしばしば現れるものである。二つ目の特徴は非母語話者による話の中断に対して母語話者は適切な単語を提供し、その単語を用いて非母語話者は話を継続することである。三つ目の特徴は、適切な中国語の単語を使うことができない非母語話者はしばしばジェスチャーなどの非言語行動を行い、母語話者に助けを求めることである。この三つの特徴から異文化コミュニケーションの能力に必要な要素が以下のようなものであるということが分かる。一つの要素は「効率的な話し方」とタイミングである。即ち、非母語話者が分からない単語で悩んでいる間に、母語話者はそれに合わせて直ちに適切な単語を提供することである。もう一つの要素は異文化コミュニケーションの中に母語話者と非母語話者のそれぞれの役割分担がはっきり見えることである。即ち、言葉の使用に関して母語話者は教え手、非母語話者は習い手の役割を担うことである。三つ目の要素は非言語的手段の使用である。本稿の結論として記した異文化コミュニケーションを行う対話者同士は上述した三つの要素を用いることによって会話に協力し合い、母語話者の言語知識をもとに非母語話者の言語障壁を解決することができると考える。

1．3　日本人とシンガポール人との異文化コミュニケーションにおける背景

1980年代からシンガポールは日本人にとって大変人気のある観光地であるだけでなく、投資の対象として有効であり、また働きやすい国であると見られている。このような状況のもとで、多くのシンガポール人は民間の学校や大学で日本語を習い始めた。現在、観光客のほかに、シンガポールに滞在している日本人、例えば、社会人、主婦、学生の数はかなり多い。同時に日本語を習うシンガポール人も増えており、日系企業に勤めているまたは勤めたがっているシンガポール人もかなりいる。

以上のような背景から日本人とシンガポール人が接する機会は多いと考えられる。英語でコミュニケーションを図ることもあるが、この調査では日本語で行われるコミュニケーションを中心とし、日本人とシンガポール人との会話で生じたコミュニケーションの問題を見ていく。さらに、日本人とシンガポール人がそのような問題を解決するために使用する相互協力的コミュニケーションの方略を見て行きたい。この調査結果に基づいて、これから日本人とシンガポール人との異文化コミュニケーションに生じる問題への予測に役立ちたいと考える。さらに、双方の対話者がこのような問題を最小限にしようとする意識を高めることを望んでいる。

2．相互協力的コミュニケーションの方略

2．1　相互協力的コミュニケーションの方略とは何か

前述した Neil の先行研究では相互協力的コミュニケーションの方略は異文化コミュニケーションをうまく行うために対話者同士が使用する方略である。Neil は相互協力的コミュニケーションの方略を「話し手ストラテジー」（speaker strategies）と「対話者ストラテジー」（interlocutor strategies）に分けたのである。「話し手ストラテジー」とは情報をうまく相手に伝達できるように促す手段である。「対話者ストラテジー」とは聞き手が情報をうまく解釈できるように促す手段である。これらの方略は円滑な異文化コミュニケーションに不可欠なものであると Neil は主張した。

相互協力的コミュニケーションの方略にはいくつかの特徴がある。まず、相互協力的コミュニケーションの方略は会話を円滑に行うために発話者同士によって使用される会話の技術である。次に、この会話技術は事前に、発話者によって準備され、計画されるものである。さらに、この会話技術はコミュニケーションに生じる問題を解決するためによく使用される。最後に、この会話技術は対話者同士がお互いの話を理解し合うために協力して行うものである。この調査で取り上げる相互協力的コミュニケーションの方略は「反復」（repetition）、「パラフレーズ（遠回し・言い換え・おおよその表現）」（paraphrase）、「明確化要求・協力要求」（clarifiers, cooperative strategies）である。(1)

2．2　「反復」

「反復」または「繰り返し」に関する研究は今でも盛んである。Neil によって「反復」は直前に現れた発話の一部または全体の繰り返しや重複を指すものであるという。または、熊谷（2001：39）によれば、「繰り返し」の範囲

(1)　この３つの方略はもっとも調査データで現れたものである。

は『話の中で、すでに言われた事柄（言葉や内容）を再び言っているもの』であると定められる。

Neil は「反復」の機能を次のように取り上げた：①強調（発話者は自分が言っていることを強調する）；②説明を求め、相手の話への理解を高める（明確化要求・協力要求という方略とほぼ同じ働きである）；③コミュニケーションを保ちながら考える時間を延長する（特に学習者の場合）；④応答の合図（話を理解していることを示す）；⑤レトリック的な手段（自分の発話権利を守るため）；⑥反復使用頻度によって発話者の文化的な特徴が見える。または、熊谷も「繰り返し」の働きを次のように分類した：①情報を、よりよく伝える、あるいは確実に聞き取る；②相手との連帯感を作り上げる；③相手に対する働きかけ（依頼、主張など）を強める；④より少ない労力で話の間をつなぐ；⑤ことばのリズムやテンポを整える；⑥話題を戻したり、話の軌道修正をしたりする；⑦話を締めくくる。

「話し手ストラテジー」は「他者による反復」と「自己による反復」がある。「他者による反復」は話し手が話し相手に「反復」を要求される場合に起こるものを指す。「自己による反復」は強調、相手の反応がない、話が重なるというときに起こるものを指す。この調査で、上述した「反復」の機能をもとに、調査データに現れた「反復」を取り出し、対話者同士の協力的行為を見ていく。

2．3 「パラフレーズ」（言い換え・遠回し・おおよその表現）

『ロングマン応用言語学用語辞典』(1995) では「パラフレーズ」は「ある語や句の意味をより容易に理解できるようにするために、他の語や句を使って表現すること」と定義された。「パラフレーズ」は第二言語習得におけるコミュニケーション・ストラテジーの研究の中にごく重要なストラテジーであると見なされる。コミュニケーション・ストラテジーの研究者等（Faerch and Kasper 1983, Tarone 1977）によって「パラフレーズ」の現象に似たようなものを「言い換え」、「遠回し」または「一般化・おおよその表現」と名づけて分けられるが、ここではこれらの現象をすべて「パラフレーズ」にする。(2)

コミュニケーション・ストラテジーの研究においては学習者が使用する「パラフレーズ」のみの調査が行われてきた。しかし、円滑な会話は対話者同士が作り合うものであるため、相互協力的コミュニケーションの方略においては学習者側だけでなく、その対話者側の「パラフレーズ」も調べる必要がある。「話し手パラフレーズ」は、自らの話の意味をより容易に理解できるように他の言葉で言い換えたりして、対話者同士の理解を高めるという働きがある。「対話者パラフレーズ」は対話者が自己の理解を確認するために話し手の発話をもとに他のことばで言い換えることを指す。異文化コミュニケーションの対話においては双方の「パラフレーズ」によって円滑なコミュニケーションのための対話者同士の協力的な行為が生まれるのである。

2．4 「明確化要求・協力要求」

学習者は言葉が分からない、言えないときに、または相手の発話を聞き取れない、理解できないときに、何らかの手段で話し相手に助けを求めることがよくある。使用される手段は「明確化要求・協力要求」という。または、対話者も学習者が言ったことを理解できない、聞き取れないときに、学習者に説明や反復などを求めたりするときに、「明確化要求・協力要求」を使用する。研究者によってこのような方略は異なる名とつけられることがある。Neil はこのような方略を「明確化要求」として扱うが、Faerch and Kasper は「協力要求」として扱う。または、他の研究者は「聞き返し」という名をつけたのである。ここでは、このような方略をすべて「明確化要求・協力要求」として扱う。

「明確化要求・協力要求」の機能は以下の通りである：①理解の確認（話し手は聞き手が自分の話を的確に理解できたかどうかを確認する（例：「わかりますか？」））；②話し手はわからない表現などを話し相手に尋ねる（例：なんといいますか？）；③聞き手は話し手に要点の繰り返しを要求する（例：「もう一度」「えっ？」「すみません」など）；④聞き手はもっと明確な情報を話し手から引き出す（例：「どうして？」など）；⑤聞き手は話し手が言ったことを要約して意味を確認する（例：「つまり ..... ですね」）。機能①と②は話し手側の方略、機能③から⑤は対話者側の方略と Neil によって分類される。

3．調査方法

3．1 調査目的

日本人とシンガポール人が異文化コミュニケーションをとる際に、コミュニケーションの問題が生じる原因を知ることはこの調査の目的の一つである。もう一つの目的として、円滑な異文化コミュニケーションを図るために、日本人とシンガポール人はどのような相互協力的コミュニケーションの方略を使用するのかを明らかにすることも考えて

(2) Faerch and Kasper (1983) はパラフレーズの現象を「一般化」と「遠回し」に分けた。しかし、彼らのコミュニケーション・ストラテジーの分類ではこの２つが同じ「中間言語に基づく方略」として扱われた。Tarone (1977) はパラフレーズの現象を「遠回し」と「おおよその表現」に分けた。

いる。さらに、そういった方略の使用によって、日本人とシンガポール人とのコミュニケーションがどの程度うまく行われるのかを調べる。

3．2　調査対象

調査対象はシンガポール国立大学の三年生（シンガポール人日本語学習者）の10名とシンガポールに滞在している日本人の２名である。日本人の一人は交換留学生の二十代の男性で、当時シンガポールに滞在した期間が僅か二ヶ月であった。もう一人は二十代の女性で、シンガポールにある民間の日本語学校で日本語を教えており、六ヶ月もシンガポールに滞在していたため、日本人の男性よりシンガポールの風俗や習慣などについて詳しかった。

3．3　データの収集

「シンガポールにある中国系のお正月」というテーマを定め、テーマの範囲内で調査対象同士が自由会話を交わすように設定した。対話者同士の組み合わせは一人の日本人に対して５名の学習者である。10分ほどの会話を録音し、文字化したものをデータとして分析した。

3．4　データの分析方法

会話の中で生じたコミュニケーションの問題や誤解、または対話者同士がどのような相互協力的コミュニケーションの方略を採用してそういった問題や誤解を解決するかに注目し、データから抽出する。第２章で記述した「反復」「パラフレーズ」「明確化要求・協力要求」の方略にふまえて、対話者同士が使用した方略を取り上げる。さらに、そういった方略の使用によって、日本人とシンガポール人とのコミュニケーションがどの程度うまく行われるのかを調べるため、著者自身の判断の上に、日本人との内省インタビューを行い、彼らの判断を加える。著者と日本人との意見が不一致の場合、それを調査分析結果から除外する。意見が一致する場合、コミュニケーションがうまくいったまたはうまくいっていない原因を述べる。

3．5　調査結果

実例１から実例５は調査データ（学習者と日本人との会話）の分析対象の一部である。データから抽出した例をもとに、コミュニケーションの問題と相互協力的コミュニケーションの方略を以下のように示す。

実例１

1	L	あー、うん、シンガポールは、中国人のお正月は、たぶん新年、あ、新年、あー、にー、にげつ、にげつ[3]
2	N	お、二月
3	L	二月、から、さんーがつ
4	N	お、お、
5	L	あー、二月の、何？まつ？
6	N	正確には、二月の何日から？
7	L	えっ？
8	N	正確には、
9	L	うん、はい、
10	N	二月の、何日から、何日までですか？
11	L	あ、あ、うん、26日、たぶん
12	N	は、は、

学習者はシンガポールのお正月の期間を対話者に説明をしようとした。彼女は発話順番の１では「自己による反復」を用いて「にげつ」を二回繰り返した。ここでは彼女は対話者に助けを求めているかどうかをはっきり判断できないが、「月」の正確な読み方を迷っていることは明らかであった。対話者の日本人もそれに気づいて、発話順番２で「にがつ」という正確な読み方を提供して学習者の発話への助けをした。学習者は発話順番３では対話者の助けを受け、次の発話の「さんがつ」に応用した。この例では対話者同士の協力的な行為が起こったと見える。

学習者との内省インタビューによれば、発話順番５では学習者は「二月の末」を言おうと思ったが、そこでは「末」の読み方を迷っていて、「協力要求」の方略を用いて「何？まつ？」と対話者に質問した。対話者は学習者の質問を言い換え、助けようとしたが、学習者はそれを理解できず、「えっ？」と再び対話者に助けを求めた。それに応じて、対話者は発話順番の８と10で質問を繰り返したり言い換えたりした。発話順番11では対話者同士がお互いの話が理解できたため、コミュニケーションがうまくいったと見られる。

実例２

1	L	はい、うん、その日は、あ！あのーうん、新年のー本当、本当の新年のーあ日の前、は、晩、
2	N	うん、

(3) 表記記号：「N」日本人　「L」学習者
「、」自然なポーズ　「？」音の上昇
「－」拍の長音化　「！」感嘆
「(笑)」話者が笑っている様子

3　L　前の晩、知っている？分かった？（笑）
4　N　うん、うん、分かりました

学習者は「大晦日」という言葉を知らないために、「パラフレーズ」でそれを対話者に描写してみた。または、発話順番３で「前の晩」と繰り返し、「大晦日」の意味を強調してみた。さらに、「明確化要求」を用いて対話者が話を理解できたか否かを確認した。発話順番４では対話者の理解が示され、コミュニケーションがうまくいったと言える。

実例３

1　L　シン、シンガポールの新年はーだいたいつまらないです（笑）
2　N　あ、そうですか、そうですか（笑）
3　L　とても静か、とても静かです
4　N　おーう
5　L　あのマレーシアのー新年はもっと、oops, forgot the word!（笑）あのーもっと
6　N　うるさい
7　L　うるさい、はい、あのー花火もあります

発話順番５では学習者は「うるさい」という単語を忘れたことを独り言を言って示した。対話者は学習者が以前発話した内容を利用して、問題点を推測して適切な言葉を提供した。このような協力的な行為によってコミュニケーションがうまく行われたと見られる。

実例４

1　L　でもシンガポールはあのー、ばん、晩御飯の後で、たぶん、ang pao？あの赤いのー、赤いのーなにか、あー紙？
2　N　おう、おう
3　L　（笑）の中に、お金がいります
4　N　おう、入れる
5　L　入れる、はい、うん、うん、晩御飯の後で、両親？
6　N　両親ね、両親、うん、うん
7　L　もらいます私あの両親、から、もらいます？
8　N　あ、いいよ
9　L　あのその赤いの（笑）
10　N　赤い紙を
11　L　はい、あっ、あのシンガポールは、ang pao
12　N　うん
13　L　ang pao の、その名前あの赤い紙が、お金が、いります、入れる
14　N　アンパンの中に
15　L　はい（笑）
16　N　アンパンの中に紙を入れるの？（笑）
17　L　うん？
18　N　アンパンの中に紙を入れるの？
19　L　いえ、いえ、違う、紙？（笑）お金
20　N　あ、お金を入れる？
21　L　はい、お金を入れる
22　N　それを食べるんですか？
23　L　えっ？食べる？
24　N　え
（省略）
29　L　えっ？どうして食べる？（笑）
30　N　アンパンって食べるもんじゃないですか？
31　L　（笑）アンパンじゃない（笑）
32　N　えっ？
33　L　ang pao！その、あの、うん中国語

ここではコミュニケーションに生じた問題や誤解が対話者同士の相互協力的な行為によって解決されたと明らかになった。学習者はお正月にある「お年玉」という言葉を知らないため、発話順番１から13まで「パラフレーズ」を用いてお年玉のことを描写してみた。発話順番１では、お年玉用の袋は紙でできたこととその色を説明しようとした。学習者は「赤いの」を２回繰り返した。これは「反復の方略」の③（コミュニケーションを保ちながら考える時間を延長する）に当てはまると考えられる。または、発話の最終の部分での「紙？」は学習者が対話者に言葉の正確さを尋ねるというより、むしろ自分の話が相手に通じたかどうかという確認を求めたものである。発話順番２で対話者の理解を得たため、発話順番３で学習者は話を続けた。

発話順番３から５までにおいては、対話者は学習者が「いります」と言い間違えた言葉を訂正した。学習者はそれを受けて自己修正を行った。さらに、以降の発話では「入れる」という正しい表現を使えるようになった。これは、効果的なコミュニケーションが行われたと考えられる。発話順番５から７までにおいては、学習者が「両親？」「もらいます？」という「明確化要求・協力要求」の①（相手の理解の確認）を使用したことに対して、対話者は発話順番８で「いいよ」と言って理解を示すとともに学習者を安心させた。

発話順番13までのコミュニケーションがうまく進んでいると見えるが、発話順番14ではコミュニケーションの誤解が生じたと対話者の発話によって分かった。学習者はお年

玉のことを表現するためにシンガポールで使う「ang pao」という言葉を訴えたが、発話順番13までの話が相手に通じたと思っていた。しかし、対話者は常にそれを「アンパン」と勘違いし、話を誤解した。但し、このような誤解は対話者が発話順番22で用いた「明確化要求」の方略と、学習者が発話順番33で用いた「パラフレーズ」によって解けたと見える。

実例5

1	L	はい、はい、はい、はい、あー、then、あー、lion dance ありますす
2	N	ライオンダンス？は、何ですか？（笑）ライオンダンス
3	L	ライ、ライオンダンス、あー
4	N	ライオンの踊り？
5	L	男の、男の人、あー、dress in, they have, like a lion costume lion costume
6	N	ライオンのコスチューム？（笑）
7	L	で、ダンス
8	N	ダンス？男の人が？
9	L	はいはいはい、とてもうるさい、うるさい
10	N	えー、あー、そうですか

この例は学習者が「パラフレーズ」を用いてお正月にある「獅子舞」を対話者に描写してみたものである。学習者は「獅子舞」という言葉を知らないため、「lion costume」とか「男がダンスする」とか「とてもうるさい」という表現でそれを表した。対話者は発話順番2で学習者に「lion dance」の説明を求め、さらに発話順番4で学習者の発話を「パラフレーズ」してもう一度尋ねた。発話順番10で対話者が「そうですか」と応答の合図をして「獅子舞」の話を理解したことが示されたため、この話は対話者双方にとってうまくいったと考えられる。

4. 考察

この調査データで観察した異文化コミュニケーションの問題の原因は次のようなものである。観察に偏見が生じる危険性を避けるため、対話者との内省インタビューに基づいて問題の確認をした。一つは学習者の言語知識の不足によるものであると思われる。例えば、例5のように学習者が「獅子舞」という表現を知らないため、会話は発話順番2からスムーズに進まなかったということがわかった。もう一つは対話者同士がお互いの発話を聞き取れなかったり、理解できなかったりすることによるもの場合であると考えられる。

さらに、日本人との内省インタビューでは日本人の対話者は学習者が話したことにおいて、言葉上の意味を理解できたが、学習者と共通する社会的知識または常識が欠けているため、話の内容を理解できないまたは想像がつかない場合があった。これもコミュニケーションの問題が生じる原因の一つであると考える。例5の日本人との内省インタビューによると、日本人は学習者の話から「獅子舞」という話としては理解できなかった。むしろ、男の人がぬいぐるみのライオンの格好をして町で踊るというイメージをした。このような誤解が生じた原因は二つ考えられる。一つは前述した学習者の言語知識の不足によるものであると考えられる。もう一つは、日本人の対話者はシンガポールのお正月に関して学習者と共通する知識が欠けていると思われる。

しかしながら、この調査によると、対話者同士の相互協力的な行為によって円滑な異文化コミュニケーションができた場合も少なくないことが分かった。前述した例2では、学習者は「大晦日」という言葉を知らなくても、「パラフレーズ」や「明確化要求・協力要求」などの方略を使用して、うまくそれを話し相手に伝えたのである。または、例4によれば、コミュニケーションに問題や誤解が生じても、対話者同士は相互協力的コミュニケーションの方略を使用することよって問題や誤解の解決ができると分かる。

この五つの例では、学習者が対話者の発話を繰り返し、それを自分の次の発話に用いることがよく見られる。この特徴はシンガポールの日本語教育においては、大変重要な要素であると思われる。日本語教師が学習者の間違った発話を訂正したり、正確な表現や言葉を提供したりすることの有効性に関しては、すでに研究され、議論されている。しかしながら、この調査データから見ると、学習者の発話を訂正したり正確な表現を提供したりすることは学習者の学習に、または円滑なコミュニケーションに大変有益であるといえるであろう。従って、この点に関して、シンガポールの日本語教育ではこれを無視することはできない。

5. 結論

この調査は日本人とシンガポール人との異文化コミュニケーションにおける特徴を明らかにする試みの一つである。調査の目的の一つは、日本人とシンガポール人は日本語でコミュニケーションを図る際にどの原因でコミュニケーションの問題が生じるのかを調べることである。調査の分析結果によると三つの原因が考えられる。一つは学習者の言語知識の不足によるものである。もう一つは対話者同士がお互いの発話を聞き取れなかったり、理解できな

かったりすることによるのである。さらに、話し相手は言葉上の意味を理解できても話し手と共通する社会的知識または常識が欠けていることによってコミュニケーションの問題が生じると考えられる。

この調査のもう一つの目的は、円滑な異文化コミュニケーションを図るために、日本人とシンガポール人はどのような相互協力的コミュニケーションの方略を使用するかを明らかにすることである。調査データによると、日本人とシンガポール人はしばしば「パラフレーズ」「反復」「明確化要求・協力要求」の方略を使用し、コミュニケーションを円滑に行ったという。この三つのほかに、コミュニケーションを円滑にさせる方略があるということは確かにありえるが、この調査データではもっとも多く現れたものは上述の三つの方略である。さらに、対話者同士の相互協力的行為はこの三つの方略が使用される場合に極めて明白である。

最後に、このような方略の使用によって、日本人とシンガポール人とのコミュニケーションがどの程度うまく行われるのかを調べることもこの調査の目的である。調査結果では相互協力的コミュニケーションの方略の使用を通して日本人の対話者は学習者により話しやすい環境を作ってあげることができると分かった。または、学習者も言語知識の不足を補うことができることも見える。さらに、会話の中で生じたコミュニケーションの問題や誤解などが対話者同士の相互協力的な行為によって解決された場合は多かった。従って、この調査結果として日本人とシンガポール人との異文化コミュニケーションがかなりうまく行われたとも言える。

異文化コミュニケーションを図る際、対話者同士が共通する知識や常識を持つことが大変重要であると思われる。この調査の発展としてはどのようにその知識や常識を認識させることであると考えられる。特に、シンガポールにおける日本語教育では日本語教師はシンガポールのことに詳しければ詳しいほど、日本語教育に大変有益であると考えられる。

参考文献

Faerch, C., & Kasper, G., 1983c, *On identifying communication strategies* in interlanguage production, In C. Faerch, & G. Kasper, (eds.), Strategies in interlanguage communication, pp.210-38, London: Longman

Funayama, Izumi, 2002, "Intercultural Competence as Interactive Collaboration: Intercultural Communication in a Chinese-Japanese Joint Venture", *Speech Communication Education,* Vol. 15, pp.33-49

Jack C. Richards, John Platt & Heidi Platt, (ed.), (1992), *Dictionary of language teaching and applied linguistics,* UK: Longman

Lustig, M. and Koester, J., (2nd Ed.), 1996, *Intercultural Competence: Interpersonal Communication Across Cultures,* HarperCollins College Publishers, USA

Neil, M. Deborah, 1996, *Cross Cultural Communication: Collaboration in Intercultural Discourse,* Peter Lang, Frankfurt

尾崎明人（1992）「*「聞き返し」のストラテジーと日本語教育*」『日本語研究と日本語教育』カッケンブッシュ寛子他編　名古屋大学出版会

熊谷智子（2001）「*言語行動を観察する－くり返しのはたらき－*」『新「ことば」シリーズ13「ことば」を調べる考える』国立国語研究所